

JA自己改革のシンカ※

くらし・
地域編

No.12
2026.9.30

兵庫県 JAたじま

JAの食農教育等応援事業

小学校への独自支援

食農教育や環境保全教育で地域活性化へ

※シンカは、以下の3つの意味を含めた言葉。

自己改革の進化から深化へ、真価を発揮する
3つの「シンカ」



小学校の切実な声からスタート、管内全20校へ広がる支援の輪

兵庫県のJAたじまは、教育の一環で野菜の栽培などに取り組む小学校に対し、苗や肥料といった資材の費用を最大5万円助成する「食農教育等応援事業」を独自に取り組んでいます。2022年度に事業が開始され、26年度には管内の全20校が活用しています。

事業を活用する小学校では、春から秋にかけてトマトやピーマン、ナスといった夏野菜や、パケツ稲を学校で栽培。JAの環境保全型栽培稲作「コウノトリ育む農法」について、JA職員が説明し、田んぼの生き物調査をする場合もあります。児童が栽培に関わることで、学校関係者からは「地域に見守られ体験学習ができる機会は貴重」などの声が上がっています。



田んぼの生き物を調査し(左)、捕まえた生き物を観察する様子(右)

地域と学校が一体となった食農体験と、広がっていく参加者の笑顔

JAは以前から、JA兵庫信連による環境保全教育助成事業を活用して食育活動をしていましたが、コロナ禍の20年度に中止しました。その後、管内の小学校からは「同じような助成事業をJA独自でできないか」という要望が多数寄せられました。これを受け、JAは学校単位で行う食農教育や環境保全教育に関する活動費用を助成する事業を独自にスタート。当初は最大3万円の助成を実施し、現場のニーズを捉えた取り組みは大きな反響を呼びました。

事業の特徴は「壁新聞」の作成です。児童は、栽培の記録や感想を模造紙にまとめ、JAに提出します。「壁新聞」を最寄りのJA支店に展示することで、来店した児童の祖父母から「孫の姿を見に来た」と喜ばれ、支店が世代間交流の拠点となっています。



児童が作成した「壁新聞」

「食と農の大切さ」を次世代につなげる

JAは小学校への支援だけにとどまらず、小学生を対象にした「あぐりキッズスクール」も開催しています。

4～11月にかけて月に1度、果樹農家の園場(ほじょう)で果物の管理作業を体験したり、稲作農家で田植えから収穫まで体験したりします。こうした教育活動を通じて、若い世代や地域住民に地産地消の重要性や農業の多面的機能を伝えるとともに、JAが地域社会に不可欠な存在であることを強くアピールしています。JA担当者は「農業地帯にありながら、自宅では農業体験をする機会が減っています。食と農の大切さを理解してもらい次世代につなげていきたい」と話します。

今後も持続可能な地域社会づくりを目指し、食と農を通じた地域とのつながりを深めていく考えです。



(上) 真剣な表情でナシの受粉作業に挑戦
(下) 収穫したばかりの新鮮野菜でカレー作り

問い合わせ JA全中 JA組織・経営対策部 JA改革支援課 ☎03-6665-6040 ✉jakaikaku.s@zenchu-ja.or.jp

JAグループのホームページから、自己改革の成果をまとめた動画や全国のJAの取り組みがご覧になれます。

<https://org.ja-group.jp/challenge/>

発行/JA全中(一般社団法人 全国農業協同組合中央会)



JAグループ

耕そう、大地と地域の未来。